

売薬の意匠あれこれ 〈その8〉 釣銭皿・釣銭マット

北多摩薬剤師会会長・立川市薬剤師会会長代行 平井 有 (ひらい たもつ)

今回ご覧いただくのは、かつてメーカー各社が販促品の一つとして提供し、薬局で実際に使われていた「釣り銭皿」や「釣銭マット」などのアイテムです。「釣り銭皿」は「釣銭トレー」や「キャッシュトレー」とも呼ばれ、実用品として重宝されましたが、同時に企業名や商品名をピーアールするための宣伝ツールでもありましたので、釣り銭皿としての品質を確保しつつ、材質や形状、デザインなどに工夫を凝らしたものが次々と登場しました。

近年、医療業界でもICT (Information and Commu-

nication Technology: 情報通信技術) の伸展は目覚ましく、電子お薬手帳や電子処方箋などの普及が進められています。

支払いに関しても後払い式のクレジットカードや前払い式のプレペイドカードといった電子マネーが登場し、あっという間に行き渡りました。最近では、携帯電話やスマートフォンで電子決済ができる「おサイフケータイ」が登場しました。薬局の店頭で現金のやり取りをすることが無くなるのも、そう遠い未来の話ではないかもしれません。



【ホシ胃腸薬】
直径140mm

SF作家星新一の実父である星一氏が創業した星製薬の主力製品「ホシ胃腸薬」の釣銭トレー。一氏は、星薬科大学の前身「星製薬商業学校」の創立者でもある。



【大学目薬】
直径140mm

1899年(明治32年)発売の「大学目薬」は、(現)参天製薬創業時からの製品である。当時、ドイツより招聘され東京大学医学部で教鞭・診察にあたったベルツ博士の肖像が描かれている。

【貴妙パスタ】
直径175mm

パスタという一般にはスパゲッティ、ラザニアなどの麺類を指すが、この場合は泥膏(でいこう)ともいう外用剤のこと。昔は、ネル(綿フランネル)という布に延ばして患部に貼った。



【仁丹】 縦165mm×横230mm

「完全なる「懐中薬」・最良なる毒消し」として1905年(明治38年)に森下仁丹の前身、森下博薬房から発売された「仁丹」は、発売わずか2年で家庭薬の売上高トップとなった。大礼服姿の紳士のトレードマークや生薬が刻印された革製の立派なトレー。



【改源】 縦150mm×横250mm

近年では珍しい薬包紙に包まれた風邪薬「改源」。「風神雷神図屏風」の風神をモチーフとした風邪の神様のキャラクターの「風邪引いてまんねん」というコマーシャルの台詞が、関西ではよく知られている。



【ピロピタン】
縦155mm×横190mm

薬ではないが昭和レトロを感じさせる乳酸菌飲料「ピロピタン」の金属トレー。1970年代は「ヤクルト」「森永マミー」など大手企業に始まった小瓶乳酸菌飲料市場に同品のようなローカル企業が参入し、自社ブランドを全国区にすべく群雄割拠する黄金時代であった。